

狂言『魚説教』における狂言綺語思想

原田香織

はじめに

『日本書紀』卷第二十二推古天皇十二年夏四月の条には聖徳太子の十七条憲法があり、

一曰、以レ和爲貴、無レ忤爲レ宗。人皆有レ党、亦少レ達者^一、是以或不レ順^二君父^一、乍違^三于隣里^一。然上和下睦、諧^二於論^レ事、則事理自通。何事不^レ成。

二曰、篤敬^三三宝^一。三宝者仏・法・僧也。則四生之終歸、万国之極宗。何世何人、非^レ貴^三是法^一。人鮮^三尤惡^一、能教從之。其不^レ歸^三三宝^一、何以直^レ枉^一。^①

と三宝の重要性を説く。仏教的な価値基準として、「二に曰く、篤く三宝を敬へ。三宝とは仏・法・僧なり」とある。また「三宝 仏宝、法宝、僧宝」(『十卷本伊呂波字類抄』^②)や「三宝 サンボウ(仏宝、法宝、僧宝也)」(『下学集』^③)にある通り、仏法僧は三宝であり、仏教的に最重要視されるべき事項として「仏」は悟りを開いた教えの主、「法」はその教えの經典、「僧」はその教えを信奉する僧侶をいい、こ

れを世の宝にたとえていったものである。

日本中世社会においては、鎌倉新仏教を始めとして、戦乱と宗教が表裏になって存在し、特に天台宗を中心とした仏教の持つ権力は政治的にも強大なものがある。三宝は敬われるべき対象であり、法は仏典にかかれた教えの内容である。では狂言という舞台空間において仏法を「もじる」ということはどういう意味があるのか。

狂言『魚説教』(大藏流)・『魚説法』(和泉流)は、ともに崇拜の対象である尊敬すべき仏教的教えを言葉遊びである「もじり」をもちいて冒瀆し、異なる事物を言語の「ズレ」という力で呼び出し、おき替えることで「笑い」を醸成する。この場合には、仏教的教義を卑近な事物にかえ笑いに変化させる点に要所があるが、敢えて説教・説法に「魚」をつけて生臭坊主という存在を象徴し「魚」という世俗的な存在へ僧侶の存在自体を交換する。仏教的に権威ある存在に対して落差をつけながら、ナンセンスな言語遊戯になっている点が「笑い」をつくる仕掛けとなっている。

これは仏教の教えに「泥中蓮華」、すなわち泥の中からさく蓮の花

にたとえられるように、俗世間的な中にあっても、成仏得道、仏の悟りの世界へとつながる大いなる大悲から出現した「狂言綺語」説、すなわち嘘偽りといえる虚構の世界観の中にも「先、神代・仏在所讚仏転法輪の因縁を守り、魔縁を退け、福祐を招く」（『風姿花伝』第四）⁽⁴⁾という価値観が反映されていたためであろうか。或いは、室町時代以後当時すでに国家的な権力とともにありその統制に権力者が苦慮した仏教の権威性を意図的に風刺し失墜させることを目的にしたのか。仏教思想において、物語が狂言綺語説によって、虚構作品も肯定的に捉えられていく過程は、日本独自の仏教的発想の転換法であり、狂言の設定においては対象への批判・悪口・雑言を言いながら、その意味から教えを示唆する構造になっている。

本稿では『魚説教』（『魚説法』）の世界観と仏典のもじり、そして『天正狂言本』にある同じ趣向の「鳥説教」を対象として、江戸幕府へと移行するに際しての経典をもじることの意味を考えていこう。

一 墮落を描写すること

「煩惱即菩提」という思想は、煩惱を肯定的に捉え「煩惱」があればこそそれが機縁となり「菩提」へとつながるといふ思想である。つまり狂言において本能的な欲にまみれて、戒律を破る行動を舞台上で行っても、それは客観的な視点から享受する見所側の思想において「菩提」へと転換され得る。

戒律が求められるのは出家者であり、狂言の中には僧侶が主人公として登場する一連の作品群があり、大蔵流ではこれを出家類と分類している。この戒律とは、仏の定められた禁戒であり、仏道者の修行の原理・規範として重要である。特に五戒は基本的な戒律であり、日本においても『十卷本字類抄』『五戒 五智如来衆生を勧誡せしめて作せる所の業也 不殺生・不偷盜・不邪淫・不妄語・不飲酒』とある。さらに修行の過程においては在家であっても八戒（八齋戒）となると、一日の修行とはいえ、より達成度が難しくなり、この五戒に加えて「不得過日中食戒」（昼食以後食事をしない）・「不得歌舞作楽塗身香油戒」（装身具・化粧をやめ歌舞を視聴しない）・「不得坐高広大床戒」（高く広い寝台に寝ない）となる。⁽⁵⁾

破戒は俗世界と交流することで生じる。例えば平清盛の戒師でもあり、御持僧として有名であった天台座主明雲（一一一五―一一八四年）は、大僧正という地位にありながらも寿永二年法住寺合戦に参加して流れ矢で非業の死を遂げる。戦乱の世とはいえ、天台座主慈円（一一一五―一二二五年）は仏者としてあるまじき態度に『愚管抄』において明雲を厳しく非難している。戦乱の世、武家の世であればこそ戒律を破る場面は局面的に多く出てくる。

また、五戒に以下の戒律を加えて、十善戒の教義もある。宗派にもよるが、概ね「不悪口（乱暴な言葉を使わない）・不両舌（人を仲違いさせることを言わない）・不慳貪（貪欲にならない）・不瞋恚（怒ら

ない)・不邪見(誤った見解を持たない)」という戒律で、狂言の題材としては格好の内容といえる。

特に立腹というテーマは狂言では多く扱われ、例えば、狂言『腹不立』(不腹立)は「不瞋恚」を試されている。内容は常日頃「腹不立の正直坊」と名乗る僧侶が、それを試され、さんざん揶揄された結果、結局瞋恚となり腹を立てるという内容である。このように狂言の作品には、暗黙裡に世間的に認知された戒律の類をことごとく破り「笑い」に転換していく点に劇的な醍醐味がある。瞋恚は三毒(貪毒・瞋毒・痴毒)の一つでもあり、人間がもつ根本的な煩惱ともいえるが、僧侶であっても修行の過程で悪口・両舌・慳貪・瞋恚・邪見は、自身でさえ気づかぬこともある心理現象にもある。

世俗的な観点から、出家物であっても「不飲酒」・「不邪淫」について僧侶の墮落を描写した『寝替』という狂言がある。⁽⁶⁾戒律を破るテーマの『寝替』は、大藏虎明本にあり、寺の住持(僧)が好意をもつ酒屋の後家の女主人に徹夜で経を読もうと迫り、それを迷惑におもう女主人が先に酔って寝ている新発意に小袖をかけて自分は隣室で寝ていると偽り、住持は隣室に忍び込み、新発意に抱き着くという内容である。和泉流では僧は太郎冠者につかまり、からかわれて、様々な動物の鳴き声を真似させられる。

また「慳貪」、ある種の食欲さを描写した作品に『泣尼』がある。⁽⁷⁾これは出家狂言ならではの設定であるが、法談がうまくできぬゆえに

泣尼を雇い、場を保とうという内容である。『泣尼』は、大藏流・和泉流ともに現行曲である。泣尼とは法談の場所で、有難い話に感涙するという役割を演じるが職業的に法談を盛り上げる役として雇われる。この狂言では、説法の要所所で泣くべき時に泣かずに寝入ってしまう泣と、咳払いで起こそうとする住持との対立があり、住持の名誉欲と尼の金銭への執着が示されている。また檀家と僧侶との間での金銭欲、布施をめぐる攻めつたの攻防戦を描写した『無布施経』は、「慳貪」と執着を示し、読経を終えたのに檀家からお布施がでないことで四苦八苦する姿にもみられ、僧侶の金銭欲があらわになる。⁽⁸⁾

題目と念仏という宗旨が飛び交う『宗論』・『福部の神・勤入』(鉢叩)は法華僧と浄土僧の宗旨争いで芸能性が高いが、最後に「南無阿弥陀仏」と「南無妙法蓮華経」を両者が取り違える。宗旨に関わる重大な間違いともいえるが、この土台にある登場人物の人間性が問題で、僧の内面にひそむ慳貪、邪見、瞋恚などにより両者が喧嘩状態になっている点で、出家という外面性と人物に求められる徳性とは異なる点や、宗教性、信仰の在り方が問われる。

狂言においては、出家は自由出家という階層を批判していた。僧侶の階層も寺院宗派の中の権威機構が堅固な大僧正から名もなき一介の僧侶、そして出自もしれぬ輩までと出家者の対象領域は広い。狂言には当時の社会現象を伝える内容もある。例えば、『建武年間記(建武記)』にある建武元年(一一三三)「二条河原落書」においては、

此比都ニハヤル物 夜討強盜謀論旨

召人早馬虚騒動 生類還俗自由出家

俄大名迷者 (以下略)¹⁰⁾

とある。僧の還俗や自由出家という社会現象があり、これに対する規制以前に僧形をとる俗人の存在は一定数おり、狂言の中には当時の風潮が描写されている。たとえば『左近三郎』(和泉流番外曲『出家獵人』)には僧侶を愚弄するため、「妻はいるか、酒は飲むか」など脅す場面があるが、親鸞聖人のいう「肉食妻帯」の断行をする僧侶は一定数存在した。

俗人の剃髪と出家を扱った作品としては、『悪坊』『悪太郎』(伯父の手による俄出家)・『呂連』俗人の俄出家の失敗・『六人僧』(和泉流のみ)騙しあいによる出家等がある。『名取川』は比叡山で受戒した二人の僧が出家名を忘れるという作品である。いずれも出家を簡単に果たす庶民的な安易な世界観が背後にある。

またすっぱによる偽仏師が偽の仏像をつくるという話は『金津』(金津地藏 偽地藏・『六地藏』偽仏師・偽地藏、「仏師」(和泉流)偽仏師による偽仏像がある。こちらも下剋上の世界観から世の乱れを示唆する内容となるが、無論「すっぱ」の小悪党的な在り方は、注意喚起も兼ね、反面教師的な存在にもなる。

他の出家物については、より世俗的な側面があり、新発意ものは、大名狂言の主人と太郎冠者との関係性を老僧と新発意という設定にす

り替えた話といえ、入門したての若い僧侶の失敗談である。『お茶の水』(水汲)は僧侶の恋愛、『重喜』は老僧の頭を剃るうちに、間違えて鼻を剃る内容、『花折』は新発意が花見客を禁制の庭にいれるという内容、『骨皮』は慳貪で狡猾な老僧の教えを言い間違え、新発意と口論となる内容等であるが、人物像としては若さゆえに単純で無邪気な行動をするという特徴があり、言葉の表層しか受け取らない結果の取り違えである。

秀句は『薩摩守』無銭乗船―言語遊戯、また『地藏舞』―妄語・飲酒で、傘の下に宿を借りるという頓智から、地藏舞をして、主人とは打ち解ける。他にも、出家狂言には舞狂言『蛸』・『通円』・『祐善』(かさはり)・『楽阿弥』(尺八)や、和泉流のみ『小傘』(こがらかさ)・『大般若』・『どちはぐれ』(どちはぐれ)等がある。

では、戒律を守った果報としては、どのような結末が迎えられるのか、例えば能『通小町』においては「戒」を意識し、百夜通いの有様を再現してみせる痩せ男の恋の妄念が「不飲酒」について戒律を守ったことにより「仏道」へとつながる様子を描写している。「飲酒はいかに。月の盃なりとても。戒ならば保たんと。ただ一念の悟にて。多くの罪を滅して」とあり、仏教的世界観からすると、戒律は人それぞれに与えられた課題ともいえる。

二 魚と僧侶

狂言『魚説教』において魚の名前が羅列されるが、仏教と「魚」は意外に結びつきが強い。戒律という観点から、当然魚を獲ることは殺生戒につながり、仏教的な思想からは罪の意識が伴うものとなる。戒律は重要であり、それを意識させるべく魚を放つという行事がある。則ち「放生会」は、養老四年（七二〇）宇佐八幡宮の託宣によつてはじまり、大々的に石清水放生会、つまり男山石清水八幡宮の八月十五日節会が宮中節会に準じられた。「放生会」は八幡宮を中心として全国的に分布するが、生きとし生けるものの命を慈しみ、殺生を戒めるという儀式である。不殺生については『梵網経』（『梵網経盧舎那仏説菩薩心地戒品第十』⁽¹²⁾）にあり、同書は菩薩の向上心と、下巻では菩薩戒（十重禁戒・四十八輕戒）を説く。最澄がこれに基づき比叡山に大乘戒壇を建立した。「放生会」は、鎮護国家のための經典とされる『金光明最勝王経』⁽¹³⁾に根拠があり、国分寺・四天王寺などで「最勝会」と共に行事として定位される。

また「節忌」という行事もあり、在家信者が戒律を守り齋日に肉食をしないで精進潔斎すべき一定の日を指す。たとえば、『土佐日記』の承平五年（九三五）一月二四日の条に確認できる。紀貫之が節忌していた内容が伝わる。「暁より雨降れば、同じところに泊まれり。舟君節忌す。精進物なければ、午時より後に、楫取の昨日釣りたりし鯛

に、銭なければ米をとりかけて落ちられぬ」とあり、また承平五年二月八日には「今日、節忌すれば、い不用」とある。⁽¹⁴⁾中世社会において精進がどれほど守られたかは不明だが、やはり宗教的行事であるがゆえに、仏教者は在家であつても、当然精進潔斎は求められていたはずである。

一方、魚と僧侶の戒律をめぐるある種の問題提起として、『日本霊異記』の下巻第六話「禪師の食はむとする魚、化して法華経と作りて、俗の誹を覆す縁」という話があり、魚が法華経に変わる奇瑞譚である。精進潔斎と修行にうちこみすぎて体調不良となった師が、弟子に魚を求めさせるが、周囲の者に戒律を破るものとして疑われ誹謗される。しかし弟子が運んでいるのは「魚」ではなく『法華経』であるという、その通り魚は『法華経』にかわる、気高い修行者である仏者を奇瑞で守るといふ話である。こちらは「戒」よりも「僧」の生命を重視している。「実の魚体なりと雖も、聖人の食物に就きては、法華経に化せり」といふ。

精進をテーマとして戯文調で綴った滑稽味の強い作品として『精進魚類物語』がある。これは室町末期の御伽草子で作者不詳（一説に二条良基作）であるが、内容は鮭大介鱈長を大将とする魚類方（魚類・貝類を糾合して団結し、納豆太郎糸重を大将とする精進方（穀類・野菜・果物・海藻など）との合戦を擬人化して描いた物語で、鮭大介は鍋の城に籠り討死したという内容である。『平家物語』の序文

などをもじり『魚鳥平家』とも呼ばれる。こちらでも精進の勝利という内容であるが、魚が鍋の中に入るので教えというよりは諧謔的效果となっている。

視点の問題として、殺生戒が魚類側から描写される作品がある。僧と魚とが入れ替わり殺生される側の転生の体験について語る『雨月物語』夢応の鯉魚である。これは平安時代「延長のころ」（九二三―九三一年）三井寺の興義という僧侶の話で、画僧の興義が息絶えて鯉魚に化身し、三日後蘇生したという奇異な物語となっている。また舞狂言『蛸』も、蛸の幽霊が登場する作品で、大蛸が擬人化されつつ、漁師の網に捉えられ身を切られて食され最期を遂げたさまを語り供養を頼むという筋で、殺生される側の崇りや無念を諧謔的に伝える内容であり、「生」の尊重、殺生への抗議という内容となっている。

さて、魚と関係する俄坊主が登場する作品は出家狂言の中で一系列をなす。『魚説教』（和泉流・魚説法）と『惣八』（宗八）である。『惣八』（宗八）は、僧侶であったシテ惣八が還俗し俄料理人として主人に抱えられる。また同じく仕えるアドの俄僧はもと料理人である。主人はそれぞれに読経と魚料理を命じるが経験値の少ない両者はうまく出来ず、互いの仕事を取り換え、俄僧侶が魚料理をし、俄料理人が読経を読む結果となる。演能記録は明暦元年（一六五五）六月五日・江戸城二之丸慰み能（大蔵弥太郎）から、万延元年（一八六〇）五月

二十五日・江戸城西丸奥能（鷲寛太郎・触流し御能組）まで、三十三例あり江戸城二之丸、西丸の慰み能という例が多いことより、取り違えの面白さを楽しむ作品ということであろう。

狂言「魚説教」は大蔵流の名称であり、『魚説法』は和泉流・鷲流（魚談義もあり）の名称で、内容は類似している。元禄三年七月二十八日の尾張藩能組には「魚説法 山脇源助」の記録がある。一方大蔵虎明本にあることから上演はされていたと思うが、『魚説教』の上演記録は管見に入らない。幕府下などの公的な場では、そぐわない内容だったのか。僧侶を愚弄する結果にもなりうるための配慮か。

まず「説教」と「説法」という意味は類義語であり、それぞれの意味は以下の通りである。

「説教」とは、仏教の教え、仏の教えを説き聞かせることであり、三宝が「仏・法・僧」であり、釈迦如来とその説いた教え（法典）とそれを伝える僧侶ということからも、仏の「一代経」すなわち、釈迦が悟りを開いてから入滅するまでの様々な教えは重要視され、語られた。「釈迦一代の説教」という場合には、経典にも多く例が見られ、例えば

おほよそ一代の説教にすべてみえざるところは、諸仏のあひ是非する仏語なり。¹⁷⁾

（『正法眼蔵』十方）
という場合や、

夫諸宗のころまぢまぢにして、いづれも釈迦一代の説教なれば、まことにこれ殊勝の法なり。もとも如説にこれを修行せんひとは、成仏得道すべきことさらにうたがひなし⁽¹⁸⁾

蓮如『御文章』(三帖・第二)

にあり、釈迦を起点として信仰の在り方が統一的に語られる。

説教という場合には『日葡辞書』にも「Xeçio(セッキョウ)」。または、Xeçio(セッキョウ)。トキヲシユル」となる。仏の教えを説き聞かせること、宗旨を説き聞かせることである。

「説法」という場合には、説教と類似の意味で、仏の教えを説き伝えることであり、釈迦は対機説法、すなわち相手の能力に応じた教え方で説いた。三施の一である「法施」とは人に仏の教えを説いて聞かせることから、説法は重要である。また説法の中で経を読み経文を唱えることも、僧侶にとって重要な活動の一つでもある。

和泉流現行曲の『魚説法』の方は、漁師出身の新発意が、寺の和尚の留守に供養を頼まれ、お布施ほしさにお経を知らぬにもかかわらず法談を引き受けてしまい、魚の名をつづり説法をするという内容である。こちらは新発意の皮相な愚かさが強調され、お布施という金銭欲が機能し、また主人公が若い未経験の新発意であることから狂言の内容としてはより軽やかな設定となる。

この種の主人公は出家者として胡乱な人物である。『大蔵虎明本』においては、

是は津の国、兵庫の浦の漁師の成れる果てにてござある。かやうの姿になる事も、浮き世の体をおもんみるに、風の前のともし火、芙蓉の水に浮かみ、朝顔の日陰を待たぬ体なるに、明け暮れ、狐悪ばかりいたし、後世の事は取り沙汰もいたさぬ事、浅ましき身と存じ、ふつと思ひ出し、元結切つて⁽¹⁹⁾

という漁師から俄出家という設定である。当然「成れる果て」という場合には、漁師として没落した結果の自由出家、零落した様子を伝える。本質的な帰依というよりは、自由出家としての無常観をしめす。当然高潔な精神性はない。表現としては同時代的な陳腐とさえいえる定型句の無常観であり「風の前のともし火」は「一生是風前之燭 万事皆春夜之夢」(『往生講式』)、「芙蓉」は蓮の異名で、蓮が水に浮かぶのは、仏教での極楽の池に生えておりその葉は仏菩薩の台座であるという仏教的志向性であり、「朝顔の日陰を待たぬ身」は無常の象徴である。

三 魚説教

『魚説教』の作品の醍醐味は、説教の場面の聴覚的効果である。仏教的な音の響きに模して、恰も経文であるかのように魚の名前を羅列した点にある。説教の場面であるが、先に『大蔵虎明本』の該当箇所をみていこう。

いでいで魚説教一座述べんとて、いか(烏賊)にもすすき(鱸)

に煤けたる、黒鯛の色の衣を着て、乾鮭色の袈裟をかけ、すし(鮓)しやうの数珠をつまぐり、導師は高麗鮫の上にのし(鬘斗)のしと、はへ(鮓・這)のぼり、鰐口、泥鱗どでうと打ち鳴らし、先づ説法をするめ(鰻)なり、いか(烏賊・如何)にもよきききて、ふく(鱈)つつみし、うやまつて申す。

この箇所は「いぎ、では説教一座述べんと、如何にもすすけにすすけたる黒色の衣をきて、乾鮭色の袈裟をかけ、水晶の数珠をつまぐりながら、導師は高麗縁の上にのしあがり、這い上り、鰐口を、どでうどでうと打ち鳴らし、先説法をするものである。如何にもよく聞いて含みなさい。敬つて申す。」という内容で、説教を始める際の形式上の事項、法衣・袈裟・数珠により「導師」へと変身し、説教が始まる。

一代教主、さけ(鮭・釈迦)如来、ふりこ(鯛)の菩薩に申して申さば、かれい(鰈)経をならふともなまず(鯨・なまじ)にはならふべからず。ゑび(蝦)のなかなるさこ(雑魚)をたい(鯛)らげ、あぢ(鱈)むつ(鮭)もはや(鮓)く、たすかりたくもいはし(鯛)、こひ(鯉)ねがうは、ふな(鯛)らくせかいへこちこち(鯛)と招じられ、仏のたい(鯛)はみなさこしているか(海豚)。

この箇所は、魚の名前が多く入りすぎてわかりにくいのが、仏教的な主軸としては、「一代教主釈迦如来、菩薩に申しているには、観無量

寿経を習ふといつてもなまじには習ふべからず。早く助かりたくも言はじ。こい願わくは補陀落世界へ」という流れになっている。「補陀落世界」つまり補陀落は観音菩薩の在所とされる山であり、日本においては海上他界観と捨身行が融合した観音信仰によって独自の信仰形態で、日光山、那智山など観音霊地とされ、那智海岸、室戸岬や足摺岬、有明海沿岸において、補陀落渡海という船で漕ぎ出す補陀落信仰・入水往生もあつたため、実在の場所として認識される。

続いて、親不孝を戒める文言となる。

またかど(鰈)のこのみとして、親にふかう(鱈)なる事をきぎ、ゑび(鰻)と叱らるる事をきかず、さめざめ(鮫)と泣く、されば観音経の文にはひだい(干鯛)かいらげゑび(蝦)観音力とも説かれたり、また、心経の文には、阿のくたこ(蛸)

三百三文の、代にて買うたる蛸を仏に奉れば、

罪(廉)の此の身として親不孝になることで叱られることをきかずに、さめざめと泣く後の箇所は「されば観音経の文には「悲体戒雷震念彼観音力」とも説かれたり」という意味になる。つまり『観音経』(『観音経普門品偈(世尊偈)』)で、観音様は悲しみ苦しむ人々を救うという自戒を雷のように身心に響かせてゆるぎないものとなっている状況であり、「念彼観音力」(観音様の力を念じなさい)という語が『観音経』に多出するのは周知のとおりである。

「心経の文には、阿のくたこ三百三文の、代にて」は、「般若心

經の文には、阿耨多羅三藐三菩提の題にて」という意味である。「般若心経」にある「三世諸仏 依般若波羅蜜多故 得阿耨多羅三藐三菩提」の箇所であり、「阿耨多羅三藐三菩提」は *anuttara samyak-sambodhi* の音写であり、無上正等正覚、無上正真道、無上正遍知と訳される。

日本文学においても伝教大師最澄が、帰朝後に天台宗開祖となり、天台宗総本山である比叡山延暦寺の根本中道を建立する時の和歌によって、「阿耨多羅三藐三菩提」という存在が非常に有名になった。以下の通りである。

比叡山中堂建立の時

あのかたから さみやさほたの ほとけたち わかたつそまに み
やうかあらせたまへ

阿耨多羅 三藐三菩提の 仏たち 我たつ袖に 冥加あらせたまへ

この和歌は『和漢朗詠集』巻下「仏事」六〇二番や『新古今和歌集』巻二十釈教歌一九二〇番、『歌枕名寄』六〇三二番他に引用され、比叡山を象徴する和歌ともなっている。さらに慈円がこの歌を本歌として「おほけなくうき世の民に覆ふかな我が立つ袖に墨染の袖」(『千載和歌集』巻第十七雑中一一三七番、『小倉百人一首』九五番²⁰)と詠み百人一首人首により人口に膾炙する。

この箇所は「蛸を仏に」奉る展開になっているが、仏教用語として

「他己」という語もあり、これは自己という認識に対する他己であり、自己も他己も対立するものではなく、「万法に証せらるゝといふは、自己の身心をよび他己の身心をして脱落せしむるなり」『正法眼蔵』現成公按」という。

今日の説法は是までなり、相残る所は、名吉申すべし、かに(蟹)

しくどくぎぎうを、一切かつお(鱈)によらず、なまだこなまだ
こ(生蛸)、はもあみだ、はもあみだ、はもあみだ、はもあゆた
こ

「かにしくどくぎぎうを」からの箇所は、天台宗・真言宗の回向文「願以此功德、普及於一切、我等与衆生、皆共成仏道」(がんにしくどくふぎぎうおいっさいがとうよしゅじょうかいぐじょうぶつどう)に対応する。これは「願わくは此の功德を以って、普く一切に及ぼし、我等と衆生と、皆共に仏道を成ぜんことを」(『法華経』化城喻品第七)であり、皆が一緒に悟りを得られますようにという内容として人口に膾炙していた。そして「生蛸、生蛸、生蛸」の箇所は「南無阿弥陀仏」の擬音「なんまんだぶ」を早口で唱えると音声的に聞こえる聴覚的錯覚であり、続く「鱧阿弥陀、鱧阿弥陀、鱧阿弥陀 鱧鮎蛸」は、「南無阿弥陀、南無阿弥陀、南無阿弥陀、南無阿弥陀」に対応している。

經典としては、『観音経』・『般若心経』・『法華経』の著名な文に触れつつも、戯作として魚の名前を織り込んで「笑い」を醸成する点

で、説教という形式で仏教的な尊い教えを垂れる体裁をとりながら、生臭坊主という世界観を繰り広げる。この仏教的世界を示唆しつつ言語的には魚を羅列するという戯文をたどり、世界が二重に進行することで、逆説的に仏教の広範な受容の在り方、既に日常の領域にまでわかちがたく存在することがわかる。この中で「笑い」はどこにあるかといえ、アドがシテを否定するのを契機に「魚」名に意識が集中し、一見すれば經典の読誦に聞こえつつ、仏説の意味を逸脱した音の羅列になり、魚に意識を転換させる点にある。

四

さて一方で『天正狂言本』には同じ趣向の「鳥説教」という「説教」の文言を鳥に託した類似の趣向の狂言がある。『天正狂言本全注』⁽²¹⁾に詳しいが、鳥の名前を説法に織り込んだもので、以下の通りである。

仏、観無量寿経を説きたまふと言つは

とき(朱鷺・時)にさきそん(鷺・積尊)、わし(鷺)の高ね(霊鷲山)にて、しほ色の衣をめし、同じ色のくわら(掛落)さき(鷺)をつほりの上よりかけす(檀鳥)、しとしととあゆみより、いすか(鶺鴒)の上にとび(鳶)あがりしもおつ鳥、かも(鴨)四十から(四十雀)からと うとふやすかた(善知鳥安方)、つみふかき(い)(五位鷺)しやうのうそ(鷺)雲(五障の薄雲)はれが

たし。口おし(鷺)くあさましこおもへども、おもしろく御口をつはめ(燕)て、人をすすめ(雀)てこのりをときたまふ。

この箇所は仏教的な意味は、積尊(積迦)が霊鷲山で『観無量寿経』を説いたときの様子を再現している。「時に積尊、鷺の御山(霊鷲山)にてしほ色の衣を召し、同じ色の掛落の袈裟を頭の上よりかけて、静かに歩み寄り、椅子の上に飛びあがり、罪深い五障の雲晴れ難し、口惜しくあさましいが御法をおとさになる」と法を説法したという場面に当たる。積迦が霊鷲山で説法をするときは、美しい奇瑞がおこるが、例えば『梁塵秘抄』の歌謡では、

鷺の御山の法の日は、曼陀羅曼殊の華降りて、梅檀沈水満ち匂

ひ 六種に大地ぞ動きける」(梁塵秘抄・法華経二十八品の歌序品 五八番)⁽²²⁾

と描写される。釈迦の説法を印象づける描写といえる。

この『観無量寿経』は、隋・唐代に広く流布した『仏説観無量寿経』で『観経』ともいう。浄土三部経の一つである。概容は、印度の王舎城にて太子阿闍世が悪逆を働き、父王頻婆娑羅を殺害、母后韋提希を幽閉した無道な行いを機縁として、積尊が韋提希に応じて、阿弥陀仏と西方極楽浄土を観想するための十三種の観法を説き、さらに九品往生を三種の観法で示し、浄土往生信仰を説明した内容になっている。周知のとおり善導(六一三―六八一)から称名念仏として法然(源空。一一三三―一二二二)に受け継がれ浄土教に影響を与える。

『観無量寿経』にある内容は、『今昔物語集』巻第三・二十七語「阿闍世王殺父王語第(廿七)⁽²³⁾」にもあり、阿闍世王の極悪非道ぶりを余すところなく伝えるが、母后韋提希夫人の悲願の一代教主釈迦牟尼如来への祈りがある。「願くは、一代教主釈迦牟尼如来、我が苦患を助け給へ。仏法には遇乍ら、邪見の子の為に殺されなむとす。目健連は在すや。我が為に慈悲を垂て、八斎戒を授け給へ。後生の資糧とせむ」と。この話から阿闍世王・韋提希夫人・一代教主釈迦牟尼如来・『観無量寿経』は、関係性が強くその後阿闍世王が仏教に帰依するという経緯もあり、釈迦の御法の尊さを伝える。

続いて、「鳥説教」においては、以下の通りとなる。

心さしはの者、みみつく(鵲) みみつくこれをちやうま(聴聞)して、ほたひ(菩提)をおこし、千にう寺(泉涌寺)のてらつつき(啄木鳥)に参。鶯同音に法花きやう(法華経)を夜たか(夜鷹・読、此鳥あか時のやまめからす(鳥) もろともに、こくう(虚空)を渡る時鳥、我と我名をよふ子鳥(呼子鳥・呼ぶ)、こたふる我をしらすき(白鷺・知らず)や、うかり(鴻・憂かり)とこれをおもひつつ、ただちひ(慈悲)の心のもち鳥(鶉鳥)の、仏法僧(ブツポウソウ)をくやう(供養)すなり。

仏法に志す者は、耳をつけて聴聞して菩提心を起こし、泉涌寺の寺続きに参詣して、法華経を読む、鳥が虚空をとぶとき我名を呼ぶがこたえる自分を知らぬのか、慈悲の心をもって「仏法僧」三宝を供養す

るのである。和歌において鳥を詠む伝統は、歌題として伝統的であり、仏法僧については、鳥の名前、鳴き声である。

『新撰和歌六帖』⁽²⁴⁾第六・鳥には「光俊」二五五二番(『歌枕名寄』二九五番)

まつのをの みねしつかなる あけほのに あふきてきけは ふうほうそうなく

松の尾の 峰静かなる 曙に 仰ぎて聞けば 仏法僧なく

『正治初度百首』慈円六九七番(『夫木抄』二二九一一番)

わかくには みりのみちの ひろければ とりもとなふる ふうふうそうかな

わが国は 御法の道の 広ければ 鳥も唱ふる 仏法僧かな⁽²⁵⁾

と正統的な和歌もある。つまり鳥自体は王朝時代から伝統的に和歌の歌語ともなり、『古今和歌六帖』では「鳥」「はなちとり」「ひなとり」「鶴」「雁」「帰雁」「鶯」「杜鵑」「呼子鳥」「鳴」「鴉」「鷺」「はことり」「かほとり」「鵲」「百舌鳥」「水鶏」と和歌で学ぶべき題材として重要となる。鳥・魚といった場合には殺生禁断というイメージであるが、鳥自体はその鳴き声を楽しみ聴覚的に内面意識に存在を訴えることから、美的な歌語として定位される点で、歌道仏道一如観という価値観からも、鳥を導入する世界観としては、「もじり」であつても仏教的な世界観とは乖離していないと言える。

又鶴はたか(鷹)なる人を見て、いかにく(鶺鴒)てさむか

るらん。山から(山雀)こから(小雀)木をとり出し、ひたき(鶴)あててのそな後に、あらひはり(雲雀・洗張り)や何かなくぬな(水鶏)あなと夕つげ(木綿付鳥)の、時きし(雉)をもとめあとり(花鶏)なは、これぞ則のしぎ(鳴)、菩薩の願にまさるべき。雁に鳴とくふくろう(梟)をゑんさひ、鳩をしゆ生かるこ(鴨)成仏道、しゆ生しゆ生とうんおつ
此つきは明日とき候へし。ちんちん。

この箇所は、鶴は裸の人に凍えて寒かろうと山から木をとり出し火をくべてその後を選択をして食べ物を与え、おとき(斎)を与えるならば、これは文殊の識、菩薩の願にまさるべし、という内容で善行の実践を推奨した文章になっている。「雁に鳴とく成仏道」の箇所は、先の天台宗回向文「願以此功德、普及於一切、我等与衆生、皆共成仏道」(がんにしくどくふぎゆうおいっさいがとうよしゆじょうかいぐじょうぶつどう)によりその結びとして「衆生、衆生云々、この次は明日説き候べし、ちんちん(鉦の音)」で終わる。

つまり、鳥説教の場合には、鳥の名を織り込み羅列している点では魚説教と同様の趣向といえるが、魚が仏教的世界観からはあまり肯定されないのに対して、鳥はその囀りや生態から「あはれ」という対象になっており、「もじり」といっても、美的表現に近似している。この同類の物を次々と並べる物尽くしへの趣向は、『枕草子』第三九段「鳥は」にある。長い章段で、和歌の伝統などを踏まえつつ清少納言

も力を入れて書いている。

鳥は、こと所のものなれど、鸚鵡いとあはれなり。人の言ふらむことをまねぶらむよ。郭公。水鶏。鳴。都鳥。ひは。ひたき。山鳥、友を恋ひて、鏡を見すれば、なぐさむらむ、心わかう、いとあはれなり。谷へだてたるほどなど、心苦し。鶴は、いとこちたきさまなれど、鳴く声の雲居まで聞ゆる、いとめでたし。頭赤き雀。斑鳩の雄鳥。たくみ鳥。

驚は、いと見目も見苦し。まなこゐなども、うたてよるづになつかしからねど、「ゆるぎの森にひとり寝じ」とあらそふらむをかし。水鳥、鴛鴦いとあはれなり。かたみにるかはりて、羽上の霜払ふらむほどなど。千鳥、いとをかし。(以下略)

鳥を擬人的に捉え、当時の美意識においては「いとあはれなり」「いとめでたし」「いとをかし」という評価になっている。

つまり、「鳥説教」の場合には、「鳥」が歌語であり囀りや飛ぶ姿など美的な存在として漢詩や和歌にも詠まれ、「魚」という殺生禁断や「なまぐさ坊主」といった仏教者にまつわるイメージがないため、「魚説教」のような戒とかかわる禁忌的な内容とはいえず、僧を愚弄する要素は感じられないため、仏教的な文言をもじっていても、和歌の世界を背景とした言語遊戯として俳諧的な雰囲気醸し出す印象となっている。

結

室町時代までの五山制度による禅宗の隆盛から移行し、江戸時代においては官学としての朱子学の登場から仏教に対する意識も変化してくる。身分制度と秩序、つまり君臣上下の関係を絶対視する「名分論」が朱子学の中心で、幕府の官学として保護を受け林羅山など学者が隆盛していく。また朱子学のもつ仏教・道教への批判・対抗意識から発した言説は、三宝という仏教的な枠組の中で、墮落僧や頽廢した世界を貶めるに十分であり、仏教そのものもつ絶大な権威性も江戸幕府独自の体制により変化し、出家物と呼ばれる狂言ジャンルにおいては笑いの対象に定位される。江戸幕府においては、式楽としての狂言の位置は、儀式としての饗応性「をかし」にある。

では『魚説教』において一体なぜ、仏典にある「音」の類似に拠る同音異義語的発想から、僧侶を自由出家の層に設定し、この種のもじりによる「聖」から「俗」への転換が可能になり、作品として成立しえたのか、それは反仏教的意図を込めたパロディの方向性なのか、むしろ仏教へのオマージュともいべきものなのか。ここで問題となるのは経典のもじりは、「教え」を冒瀆するか否かという点に集約される。

寺院の階級制度の中でも、特定宗派寺院に属さない私度僧は奈良時代からその存在は容認され、僧とさえ言えない存在もあった。狂言の

登場人物自体が、良識ある一般人からずれた存在に設定されているとすれば、狂言はもともと「をかし」の系譜にあり、戒律を破ることで人間の煩惱を露わにし、それを「笑う」ことで暗示的に仏教的教えを示す。「魚」という題材は、「放生会」という仏教的行事（神事的行事）からも、その点において戒律そのものを直接的に指示する。仏教者を「蛸入道」・「蛸坊主」という場合には、「生臭坊主」＝「蛸」というニュアンスの侮蔑的な意味合いを含む点にも注意したい。用例が江戸時代以後となるが、蛸入道は、江戸時代初期の成立『古今夷曲集』においては、「海にすむたこ入道もとは、いはん山のむかでかしつた生死」という狂歌があるが、志の低い墮落した僧侶もある一定数存在したことにより、『魚説教』の世界観が成立する。

『魚説教』は天正狂言本にはなく、大藏虎明本、狂言六義、鷺流保教本（名称は魚談義）に台本があるが、古記録の上演回数から見ると極めて少ない。出典である経典の文言を知らなければ見所側は具体的な文言に即した「もじり」ということに気づかぬ可能性もある。音だけではなく抑揚、強弱、拍、句切れなどでお経のように聞かせる、その落差から面白さを醸成したが、最初の設定、魚と法師という取り合わせが何より象徴的に相反する事項であり、奇異奇抜な印象となる。

厳格に考えれば、経典は一字一句違えることなく唱えなければならぬ、しかし実際には経典を読誦する際には、読む速度等からも「音」が違う響きに聞こえることがある。また一方で、大般若経六百巻につ

いては「転読」という手法もあり、例えば、『続日本紀』には神亀四年(七二七)二月・辛酉「請_二僧六百尼三百於中宮_一、令_レ転_二読金剛般若経_一」や同天平一六年(七四四)三月・丁丑「奉_レ置_二大安殿_一請_二僧二百_一、転読一日」という通り、読誦の方法が巻名と一部のみという供養の仕方もあり、身近な存在としての仏教は、有難いものとして常に民衆の信仰に根付きつつ身近に存在している。

狂言綺語思想が、世阿弥のいう「仏在所讚仏転法輪の因縁を守り、魔縁を退け、福祐を招く」点につながるとすれば、『魚説教』は煩惱即菩提という思想に支えられ、菩提心によって魚の名前を羅列しつつ、きわめて冒瀆的な雰囲気醸しつつも社会的許容範囲の中にある作品である。しかし狂言『惣八』の上演回数に比べれば、ほぼ公的に上演されていないこと、笑いという点では經典の文言を知らなければ滑稽味がわからない点からも、寺社芸能というよりは一人の人物に漁師と僧侶という二重の滑稽なテーマ設定が狂言綺語思想と相まって作品として造型された一曲であり、經典の有難い言葉も漁師にかかる音の類似性に拠る浅薄な言語遊戯にすぎないことを示す点では、諸諱性を帯びた作品といえる。

注

(1) 『日本書紀』本文の引用は、小島憲之氏・直木孝次郎氏・西宮一民氏・蔵中進氏・毛利正守氏校注『日本書紀』二(日本古典文学全集

小学館一九九六年十月)に拠る。

(2) 『十卷本伊呂波字類抄』については、正宗敦夫氏校訂『伊呂波字類抄』(風間書房一九五五年八月)参照。

(3) 『下学集』は山田忠雄氏監修『元和三年版下学集』(新生社古辞書叢刊第二、一九六八年月)参照。

(4) 『風姿花伝』の本文の引用は、表章氏校注『世阿弥 禅竹』(日本思想大系 岩波書店一九七四年四月)に拠る。

(5) 八戒(八斎戒)に関しては、平川彰氏著『原始仏教の研究』(春秋社一九六四年一月)参照。

(6) 北川忠彦氏「狂言「寝替」について」(『国立能楽堂』四九―二一九八七年九月)参照。

(7) 稲田秀雄氏「泣尼」の説法」(『同志社国文学』六二巻 二〇〇五年三月)参照。

(8) 「無布施経」については、山本東次郎氏・梅原猛氏・天野文雄氏(『鼎談』山本東次郎に聞く 狂言のすすめ―中世人の笑いと祈り)、『翁と観阿弥』(能を読む1) 角川書店二〇一三年一月)参照。

(9) 『宗論』については、林和利氏・田口和夫氏「狂言」『中世の演劇』(講座日本の演劇) 勉誠出版一九九八年二月)、神田千里氏「中世の宗論に関する一考察」(『仏法の文化史』吉川弘文館 二〇〇三年一月)参照。

(10) 『建武年間記』については、塙保己一編『群書類従』第十七輯参照。拙稿「狂言「悪坊」における頭陀行」(『文学論藻』九二号・二〇一八年二月)参照。

(11) 『梵網経』については、中村史氏「『日本霊異記』説話と梵網戒」『伝承文学研究』四一号 一九九三年三月)等参照。

(12) 『金光明最勝王経』については、田村円澄氏著『古代国家と仏教経典』吉川弘文館 二〇〇二年六月)参照。

(13) 『土佐日記』の本文の引用は、菊地靖彦氏校訂・訳『土佐日記 蜻蛉日記』新編日本古典文学全集十三 小学館一九九五年九月)に拠る。

(14) 『日本霊異記』の本文の引用は、中田祝夫氏校注『日本霊異記』(新

小学館一九九六年十月)に拠る。

- 編日本古典文学全集十 小学館一九九五年八月)に拠る。
 (16) 『雨月物語』の本文の引用は、中村幸彦氏・高田衛氏・中村博保氏校注『雨月物語』新編日本古典文学全集十三 小学館一九九五年九月)に拠る。
 (17) 『正法眼蔵』については増谷文雄氏『正法眼蔵(一六)』全訳注 講談社学術文庫 二〇〇五年四月 参照。
 (18) 蓮如『御文章』については、笠原一男氏編『蓮如 一向一揆』所収「御文」日本思想大系 岩波書店 一九七二年四月)参照。
 (19) 本文の引用は、池田廣司氏・北原保雄校注『大蔵虎明本狂言集の研究』本文篇中(表現社 一九八三年)に拠る。大塚光信編『大蔵虎明能狂言集』翻刻註解』下卷(清文堂 二〇〇六年七月)参照。
 (20) 和歌の引用『千載和歌集』・『新古今和歌集』については『新編国歌大観 勅撰集』(角川書店)に拠る。
 (21) 『天正狂言本』所収「鳥説教」については、金井清光氏著『天正狂言本全釈』風間書房(一九八九年九月)参照。
 (22) 『梁塵秘抄』の本文の引用は、白田甚五郎氏他校注『神楽歌 催馬楽 梁塵秘抄 閑吟集』新編 日本古典文学全集四二(小学館 一九九五年九月)に拠る。
 (23) 『今昔物語集』の本文の引用は、今野達氏校注『今昔物語集』新日本古典文学大系 一九九三年五月 岩波書店)に拠る。
 (24) 『新撰和歌六帖』の引用は、群書類従本に拠る。
 (25) 『正治初度百首』は『新編国歌大観』(角川書店)に拠る。
 (26) 『枕草子』の本文の引用は、松尾聡氏・永井和子氏校注『枕草子』新編日本古典文学全集十三 一九九七年十一月 小学館)に拠る。

キーワード 魚説教 狂言綺語 戒律 経典のもじり 煩惱即菩提